【課外活動】

県短生活を盛り上げます!

自治会一部会長 新留（にいどめ） 麻美（あさみ）さん

自治会二部会長 郡山（こおりやま） 愛（めぐみ）さん

県短は、課外活動も盛ん。1泊2日の宿泊研修で新入生を歓迎する「新入生交歓会」や、年2回、希望者が学科や専攻に関係なくチームを組んでスポーツに汗を流す「体育祭」、11月に3日間開催される学内最大のイベント「県大祭（文化祭）」など1年を通してさまざまな行事が催される。

これらの行事を企画、運営するのは、自治会に加入している学生たちだ。

「1年生が県短の生活を楽しめるように精一杯サポートしたい」と笑顔で話す新留（にいどめ） 麻美（あさみ）さん（19歳）。卒業して社会に出る前に、自治会活動を通していろいろなことに挑戦し経験を積みたいと、立候補して会長に選ばれた。「活動を通して、いろいろな学科の信頼できる仲間ができ、視野が広がりました。県短は少人数の分、一体感や団結力が強く、行事を全員で楽しめるのが魅力の一つ」と元気に語ってくれた。

「一から企画して、本番でうまくできたときの達成感が自治会活動の魅力」と話すのは郡山（こおりやま） 愛（めぐみ）さん（20歳）。二部商経学科で学ぶ郡山さんは、昼間はアルバイト、夜は授業と忙しい学生生活を送っている。自治会の活動は打ち合わせも多く、授業やアルバイトとの両立が大変なこともあるが、普段なかなか交流する機会が少ない一部の学生とも交流でき、楽しいと笑う。

「記念すべき60周年の今年の県大祭では、みんなと協力していつもと違う新たな県短の一面を見せたいです」。

県短に入学して1年間、いろいろな課外活動に参加して学生生活をすごく楽しめたという新留さん。「今度は自分たちが企画をして新1年生を楽しませたい」とのこと。

「県短ではいろいろな年齢の方と交流でき、人との接し方が自然と身につく。人とのつながりが自分にとっての県短の魅力」と郡山さん。

昭和天皇が植樹されたクスノキの下で。職員の方の手作りの机とベンチがあり学生たちの憩いの場となっている。

毎年、11月に開催される県大祭（文化祭）では、ステージでの催し、学内開放、模擬店出店など盛りだくさんです。

ビジネスマナー講座で電話応対に取り組む様子。

面接指導の様子。すでに春休みからスタートしており、毎日多くの学生が指導を受けている。学内には、スーツ姿の学生も見受けられた。

【就職活動支援体制】

小規模校だからこそできる就職サポート

学生部学生課

学生部次長の米増悦郎さん。

鹿児島県立短期大学が、設立以来社会に送り出した1万人以上の卒業生は、民間企業をはじめ国・県など公共団体の一員として、社会の幅広い分野で活躍している。

県短の人気の一つとして挙げられるのが、高い就職率。学生の多くが県内への就職を希望している。

「就職指導については、1年生の秋頃からスタートし、外部の講師を招いてのマナー指導や履歴書添削などを行っています。昨年度は、例年、平日に開催している保護者説明会を土日に行い、多くの保護者の方々に来ていただきました」と、学生部次長の米増悦郎さん。出来ることは、すべてしていきたいという考えのもと、希望者については、何度でも面談指導を行うなど、きめ細やかな就職支援に取り組んでいる。

「学生の名前と顔は、全員一致しますよ」と話すのは、学生課の内田克巳主幹。「小規模の学校だからできる細やかな就職支援が県短の魅力。就職の決まっていない学生に対しては、個別に連絡を取って就職指導を行っています」と語る。就職活動を間近で見ているからこそ見えてくる個性や能力、適性などに応じた求人案内を心がけている。内定を受けた学生からの報告や、卒業生が近況報告で訪ねてきてくれることが、「学生課の職員が一番やり甲斐を感じる瞬間」だという。

「辛い時期もあったが、頑張ってよかった」と山口さん。

平成21年度卒業生

山口 春歌さん（医師会勤務）

県短を希望したのは、県内進学希望ということと、カリキュラム内容に興味があったからです。

就職活動については、開始した時期が少し遅かったので、焦りはありましたが、マナー指導や面接指導、論文添削を何度も受けるうちに力が付いてきたんじゃないかと思います。

電話対応などのビジネスマナー講座は、就職してから早速役立っています。県短の魅力は、先生、職員と学生の距離が近いこと。満足のいく短大生活を送ることができました。4月に就職したばかりで、慌ただしい毎日ですが仕事が落ち着いたら県短へ近況報告に行きたいです。

【地域に根ざした研究】

香りの謎を解明したい

生活科学科 助教
木下（きのした） 朋美（ともみ）さん

「鹿児島茶には甘さを感じさせる香りの成分が多く含まれていると考えられます」と木下さん。

お茶の香りのメカニズムを研究する生活科学科食物栄養専攻 助教 木下（きのした） 朋美（ともみ）さんの研究室は、お茶のいい香りがしていた。「子どもの頃からお茶が大好きだった」という木下さんは、茶道部とお茶育研究会～飲茶（やむちゃ）の会～の顧問も務め、研究室の棚にはさまざまな種類の緑茶や紅茶、烏龍茶の茶筒が並ぶ。

東京都出身の木下さんは、高校生のころ、お茶の香りがどのようにできるのかに興味を持ち、大学4年生からお茶の香りの研究に没頭している。お茶の研究を続けたいと進路を考えていたとき、たまたま県短の教員募集を知り「お茶の生産が盛んな鹿児島県で研究ができる」と喜んで応募、平成16年9月から県短の教員となった。

「入れたてのいい香りのお茶を飲むと穏やかな気持ちになりますよね。香りは人の心理に大きく影響する成分。私たちの生活を豊かにしてくれます」。お茶の香りは100種類以上の成分でつくられ、その成分の種類と量のバランスで異なるという。「お茶の香りはお茶の風味を特徴づける重要な成分で、茶葉を販売するうえでのセールスポイントとなります。この香りを客観的に表現し、誰でも理解できるようにするためには、香りの分析データが必要なんです」と木下さん。「まず機械でお茶の香りに含まれる成分を調べ、どの成分がいい香りをつくるのか特定します。そして、その成分はどのように作られるのか、その成分を増やすお茶の栽培、製造方法は…」とお茶の香りがつくられる仕組みを解明していく。

「栽培、製造、流通の各現場で香りの分析データを活用し、茶葉の販売促進につなげたい。鹿児島県の茶業の振興に少しでも役立てるような研究ができればと思っています」。木下さんが参加した輸出向けのお茶の開発プロジェクトで商品化された、花のような甘い香りの緑茶は、ヨーロッパ市場で高い評価を得ている。

また、現在は県短60周年の記念事業として、県立農業大学校と協同でお茶の商品化を進めている。農大の学生がお茶を作り、県短の学生がパッケージのデザインや商品のネーミングを担当、今年秋頃からの販売を目指しているとのこと。

「初めて鹿児島茶を飲んだ時からほかにない香りに魅了された。鹿児島茶に秘められた香りの持つ力を解明し、広めていきたいですね」と笑顔で語ってくれた。

香りの成分や質を調べる機械を使って分析をする様子。